

魯 迅 と 郁 達 夫

ヴェ・ヴェ・ペトロフ

川 上 久 寿 記

周知のとおり魯迅は20～30年代における中国の文学運動で目ざましい役割をはたしたが、魯迅と他の作家、各種の文学雑誌、グループ、団体との関係を研究したものはまだ不十分である。本論の目的は魯迅と郁達夫(1896～1945)との関係の経過をたどること、主としてふたりの作家の1927～1933年における協力関係を特徴づけることにある。⁽¹⁾

魯迅と郁達夫は1923年に北京で知り合った。『魯迅日記』に郁達夫の名がはじめて現われるのは1923年2月17日である。⁽²⁾ 郁達夫は招かれて北京大学で講義するため、1923年9月に北京に着いた。⁽³⁾ かれは当時北京大学で講義していた魯迅と再三会って話しをしている。⁽⁴⁾ 後日魯迅はその模様をこう書いた。

「私は大分前に郁達夫氏と知り合いになった。かれの容貌には『創造社』らしきものが見えないので、私はかれと顔をつきあわせても気軽に話しができた。文学論ではわれわれの意見は一致しなかったかもしれない。しかし二人の会話は多く漫談にかぎられていた。⁽⁵⁾」

実際のところ、魯迅は北京で郁達夫に会ってもそれで直ちに協力しあうようになったわけではない。それはおそらく郁達夫が『創造社』に入っていたことが多くの理由となろうが、魯迅は自らいっているように『創造社』の人々を避けてかかわりあいたくなかったのである。というのは、その指導者のひとり成仿吾の『呐喊』攻撃があったばかりでなく、かれらのもちあわせている『創造社的』熱狂ぶりのせいである。⁽⁶⁾ 郁達夫には魯迅をブルブルさせ

る、そういう嫌味がなかった。そのため文学上の考えを異にしながらも、上に引いたように魯迅と郁達夫はお互いに理解しあえたのである。北京時代の魯迅と郁達夫の対話につき何らかの疑問をさしはさむ根拠はない、しかしそれと同時に、魯迅と郁達夫が文学にかんする討論や、ありうる協力を全くしなかったと考えるのはあまりに単純すぎるだろう。たとえば、新しい中国文学の将来を思うふたりの作家はあたりまえのことだが、新進作家育成のしかたを考えていた。

1927年1月30日に郁達夫は書いている。「34年前のこと、私は北京で魯迅と何回か話しをしたことがある。われわれは何人かの同人を集めようとし、いっしょになって新しいすぐれた雑誌を捜し出してはしらべようとした。そしてそのうちにいい作品をみつけると推薦しては知り合いになったが、それはまだ無名でいる多くの若い作家に注目されていることを自覚させ、創作にはりをもたせるためだった。その後仕事の関係で私は北京を去った。そしてこの提案もシャボン玉のように消えてしまった。だが魯迅はあい変わらず暇をつくっては志を同じうする何人かの仲間と『未名叢書』や『烏合叢書』を出した……」⁽⁷⁾

1925年のはじめに郁達夫が武漢に向け出発してから、魯迅との出会いは稀あるいは偶然なものとなった。⁽⁸⁾ 1926年末、魯迅が廈門から広州へ移ったとき、その頃広州から上海へいった郁達夫と手紙のやりとりをしている。⁽⁹⁾ 1927年の10月には魯迅と郁達夫とのつきあいがまたもはじまった。魯迅が広州から着いた3日目に二人は会っている。⁽¹⁰⁾ その後1928～1929年の間魯迅と郁達夫との交友がつづく。郁達夫はしばしば魯迅の家を訪れ、王映霞といっしょにゆき、⁽¹²⁾ お互いに本を贈りあっている。⁽¹³⁾ 『北新書局』と交渉し、自分の著作権をまもるために訴訟をおこしてもいる。⁽¹⁴⁾ 魯迅と郁達夫の友情は文学上の協力に絶好の条件をつくりだした。魯迅はこういっている。「……こうして知り合うことになった、時として私が何かの原稿をもとめると、かれはきまって約束どおり送ってよこした。かれのほうから何か求められると、私

はむろん気楽にひきうけて、何か書けるだろうと承諾したものだった……」⁽¹⁵⁾

『語絲』と『奔流』を編集していた魯迅は郁達夫をこの雑誌の仲間にひき入れた。郁達夫は『語絲』に1927年12月から1929年1月まで自分の作品をのせ、『奔流』には1928年6月から1929年12月まで作品を書いた。かれは『語絲』に何篇かの雑文とトーマス・ハーディ (1840~1928) の翻訳を2篇——芸術にかんする覚え書の断片『生活と芸術』(『哈提翁的意見零拾』)(第4巻第1号, 1927年12月17日)と『なぜ戯曲を書けないか』(『哈提翁為什麼不写戲劇』)(第4巻第3号, 1927年12月31日)⁽¹⁶⁾——を掲載した。『奔流』の執筆者のうちで郁達夫は最も積極的なひとりだった。かれの翻訳で活字になっているものは、ツルゲネフの講演『ハムレットとドン・キホーテ』(『Hamlet 和 Don Quichotte』)(第1巻第1号, 1928年6月)⁽¹⁷⁾, ドイツのドルフ・リンダウの小説『幸福の振り子』(『幸福的擺』)(第1巻第1・2号, 1928年7・8月)⁽¹⁸⁾, 英国の心理学者の本の一部, ハヴェロック・エリスの『新らしき魂』を作品化した『イプセンについて』(『伊孛生論』)(第1巻第3号, 1928年8月)⁽¹⁹⁾の翻訳, ドイツの作家フリードリッヒ・ゲルンテッテルの『ゲルメルハウゼン村』(『蓋默爾斯呵護村(廢墟的一夜)』)(第1巻第6号, 1928年11月)⁽²⁰⁾, ゴーリキイの『トルストイの思い出』(『記託爾斯泰回憶雜記』)の一部(第1巻第7号, 1928年11月)⁽²¹⁾, アイルランドのオフラエルトの小説『無宿者』(『浮浪者』)(第1巻第9号, 1929年3月)⁽²²⁾, アメリカの女流作家メリ・ウィルキンスの小説『ニューイングランドから来た尼僧』(『一位紐英格蘭的尼姑』)(第2巻第1号, 1929年3月)⁽²³⁾, フィンランド作家ユハニ・アホの小説『殘骸』(『一個敗殘的廢人』)⁽²⁴⁾, 文芸学者フェリックス・ポッペンベルグの著者の一部を訳した『アホの芸術』(『阿河的藝術』)(第2巻第5号, 1929年12月)⁽²⁵⁾などがある。

郁達夫のほうでは1928年にできた『大衆文芸』に魯迅の協力を依頼している。⁽²⁶⁾魯迅はこの雑誌に翻訳をわたして印刷に付したが、どの翻訳にも簡単なあとがきを書いて作者の生活と作品を読者に紹介した。『大衆文芸』の

第 1 号は魯迅訳ミハイル・ゾシチェンコの『女貴族』（『貴家婦女』）（第 1 巻第 1 号、1928 年 9 月）を掲載し、すぐその後ひきつづいて魯迅の何篇かの翻訳ものせられた。かれは『大衆文芸』のためにアレクサンドル・ヤコヴレーフの『農夫』と『10 月』の最初の 3 章（第 1 巻第 3 号、1928 年 11 月、第 5・6 号、1929 年 1・2 月）、コンスタチン・フェージンの『果樹園』（第 1 巻第 4 号、1928 年 12 月）、フランスのシャルル・ルイ・フィリップ（1874～1909）の小説『人喰いの話』（『食人人種的話』）（第 1 巻第 2 号、1928 年 10 月）を翻訳した。

1928 年 12 月、魯迅が『語絲』からはなれると 郁達夫はこの雑誌に書くのをやめ、1929 年 11 月に郁達夫が『大衆文芸』をとびだすと魯迅の協力もおしまいになった。1928 年から 1929 年にかけての二人にきわだっていることは、外国作品の翻訳に尽力し、何とかして自分たちの雑誌『奔流』と『大衆文芸』を通じて中国人に外国文学を紹介しようという使命感を感じていたことである。こういう共通の創作目的が魯迅と郁達夫を近づけさせたことは疑いない。それからまたかれらが北新書局と共に協力しあい、この書局が出していた雑誌の『北新』に書いていたことにも注意する必要がある。

革命文学論争の時、郁達夫は魯迅の側に立って、かれを援助した。鄭亜明はこう書いている。「『創造社』と『語絲』との間に論争が起ったとき、かれ（郁達夫——ペトロフ）は魯迅と手をにぎりあったが、それによってさらによく魯迅というひとを知ったようだ。」⁽²⁷⁾ 郁達夫は魯迅とおなじく、必要なばあい不必要なばあいをとわず、軽薄にも『革命的』言辭を弄している論争者たちに対して否定的だったし、⁽²⁸⁾ その前衛ぶりと魯迅にたいする根も葉もない攻撃のため 1927 年にはもう関係を絶ちきっていた『創造社』を批判した。⁽²⁹⁾ 郁達夫は作家としてこれらの攻撃にたいし、自分の全く確かな魯迅評価を対置している。「もし作品の深みと完整さからいえば、かれは中国の作家のうちで第一等だと私は常日頃思っている。過去も現在もそして未来においても私の考えは変わらないだろう……」⁽³⁰⁾ 4 年半後にバーナード・ショーが上海を訪

れたとき、郁達夫は誇らしそうに書いている。「幸いにも中国にはバーナード・ショーと並びうる魯迅(31)がいる」と。

1930年2月、魯迅と郁達夫は中国自由運動同盟の創立者となった。これは民主的な機関で進歩的インテリを結集して、書籍雑誌大衆組織の禁止、きびしい検閲、出版社と大学の閉鎖に反対して、言論出版集会の自由のためたたかおうとするものだった。同盟の創立総会は1930年2月15日上海で開かれた。2月16日の新聞には『中国自由運動同盟宣言』がのったが、その署名者の冒頭には郁達夫と魯迅の名が見えた。(32)

1930年3月2日には上海で中国左翼作家連盟がつくられた。当時公表された創立者名簿には魯迅と郁達夫の名がのせられていた。(33)しかし中国の文芸学者丁景唐のいうところによると郁達夫は3月2日の創立総会に出席していない。かれの名が創立発起人名簿にあるのは魯迅の提議による。(34)これによっても明らかのように魯迅は事実上広汎で影響力のつよい左翼の文学戦線をつくることに鋭意力をそそいでいた。かれは郁達夫を革命文学の利益になる味方陣営のものとみなし、革命の組織に引き入れようとした。したがって、この有能な作家の誤ちと挫折に対しては理解の眼をもってするように訴えたのである。魯迅と郁達夫を『創造者』の面々ともども左翼作家連盟に加入させたこと、特に魯迅が郁達夫を推薦したことはトロツキストの王独清をひどく立腹させた。かれは1930年9月に郁達夫のことを「とうの昔に屍にもひとしくなっている」と書いていたし、また魯迅が左翼作家を説得して「郁達夫のデカダンはゆるせる」と同意させたのだとも書いていた。(35)

王独清の考えは事実と反している。魯迅が郁達夫に好意をいただいていたし、かれの才能を高く買っていたことは事実である。この親交は一例をあげると『どのように書くか』(『怎么写』)という雑文にあらわれている。(36)かれは広州で出ている反動的な国民党の雑誌『这样做』(『こうしなさい』)に掲載の『郁達夫先生もういいよ』(『郁達夫先生休矣』)という文章の郁達夫攻撃からかれを庇った。(37)この攻撃は郁達夫の『方向転換をした時』(『在方向轉換的

途中⁽³⁸⁾) が現われた時に行なわれたものである。郁達夫の考えでは、1925～1927年の国民革命は「マルクスの階級斗争理論の具体化」であり、中国の革命運動は大衆によらねばならず、個々の英雄を目標にするのではないということだった。『这样做』(『こうしなさい』)の編集者たちはいかにも不気嫌の態で、郁達夫の書いたものは「有害であり」「分裂を教唆する」ものと断じた。これにつき魯迅は書いている。「私は何回も郁達夫先生と会っているし、何回も話し合っている。そしてかれが落ち着いた温厚な人柄であって、人や国に害毒をあたえるような人物ではないという印象をもっている……」⁽³⁹⁾

郁達夫にたいする不当な非難を弁護しながらも、魯迅はあらゆる文学作品に自伝性は避けがたいという誤った考えがみえる郁達夫の「日記文学」⁽⁴⁰⁾に賛成しかねる旨をはっきりと述べている。葦素園がゴーリキイの『トルストイの思い出』の翻訳にかれの意見を書いてよこしたとき、魯迅は郁達夫のこの翻訳の批評をやめず、葦素園の手紙を引いて『奔流』の普通号のあとがきに⁽⁴¹⁾のせた。魯迅は郁達夫を支援し、かれの挫折には理解をもつてのぞむべきであると考えたが、その支援も王独清が断言しようとしたようには決して無原則なものでなかったのである。

明らかに、魯迅は郁達夫を中国の自由運動同盟と左翼作家連盟にひき入れるために決定的な役割を果たしたのではない。かれは「自分の行動……自分の愛と憎しみで郁達夫をはげました。魯迅は郁達夫に力をあたえた。」⁽⁴²⁾残念なことに魯迅とちがって郁達夫は私事にかかずらって或る期間創作の積極性を失ってしまい、創立の時には熱心に支持した二つの機関でも事実上は活動をしなかった。この時期の郁達夫の心境は1930年4月3日に書いた『大衆文芸』の編集者への返信にあらわれている。つまり郁達夫は文学の名に値するものは何も創作しない、まともな生活はなく、生きているのではなく存在しているのだ⁽⁴³⁾と述べている。そのうえ、こうもいう「私は作家であって、戦士ではない。」1930年11月、左翼作家連盟は「組織内にまぎれこんだ反动分子の清掃」⁽⁴⁴⁾を行ない不活動を理由に郁達夫を除名した。

郁達夫は左翼作家連盟から除名されながらも革命文学とは縁をきらず、魯迅との交友は誠実なものだった。⁽⁴⁵⁾これについては魯迅と郁達夫二人の個人的な関係の特徴づける多くの事実がある。1932年の2月から郁達夫はまたも魯迅をしばしば訪れるようになった。⁽⁴⁶⁾1932年10月2日魯迅は郁達夫にフージェーエフの『壊滅』の翻訳と自分の『三間集』、それに曹靖華訳セラフィモヴィチの『鉄の流れ』(『鉄流』)を贈っており、郁達夫は魯迅に『達夫自選集』を贈っている。⁽⁴⁷⁾魯迅は郁達夫のもとへ何回かいった。⁽⁴⁸⁾1932年12月31日⁽⁴⁹⁾かれは郁達夫のために詩を二首つくっている。『無題』(洞庭に木の葉落ちて楚の空高し……)と『客のとがめに答える』(『答客誚』非情なるもの必ずしもまことの英雄ならず……)がそれである。⁽⁵⁰⁾中国でみなされているように魯迅はこの二首を書きなおして1933年1月10日に郁達夫に贈った。⁽⁵¹⁾1932年12月に郁達夫は魯迅を引き入れて上海の新聞『申報』副刊の『自由談』に執筆させるため魯迅と交渉をしている。魯迅が承諾したとき郁達夫は最初『自由談』の編集者黎烈文への紹介者になった。⁽⁵²⁾

魯迅は郁達夫の作品をひろめるために力をつくした。魯迅は1932年5月22日付、日本の作家で中国学者の増田涉宛書簡で、こういう作品を『世界ユーモア全集』のために訳したらとすすめているが、それには郁達夫と張天翼の作品に注目すること、特に「ユーモアも少しくある」とみなした郁達夫の『二詩人』をあげている。⁽⁵³⁾増田涉がこの提言をうけいれて『二詩人』の翻訳にとりかかり難かしい個所にぶつかると、魯迅は自ら郁達夫に必要な説明を求めてはかれを助けた。⁽⁵⁴⁾⁽⁵⁵⁾

魯迅と郁達夫の友情は黄色刊行物の注意を引きつけた。1933年に上海の反動新聞『大晩報』が張若谷の『ボヘミアン』(『婆漢迷』)をのせはじめて上海の文学者の悪口をたたいたが、そのうち羅無心(羅の薄情者)で魯迅を郭得富(郭のたんまり儲け屋)で郁達夫をあてこすっていた。⁽⁵⁶⁾

郁達夫が魯迅とともに中国の進歩的インテリの政治活動を支援したことを証明するもろもろの事実には特別な意味がある。1932年1月魯迅と郁達

夫は日本帝国主義の侵略に抗議した「上海文化人による全世界へのアピール」に署名した。署名したのは43名の文化人で、そのアピールは『申報』その他の上海の新聞に掲載された。それには「帝国主義の中国分割に反対、中国人民の圧迫に反対、日本帝国主義に反対」が宣言されていた。⁽⁵⁷⁾ 1932年12月に55人の進歩的作家がソ連と中国の国交回復のために人民委員会議と全ソビエト人民に電報を打った。電報には特にこういう言葉があった。「われわれはソビエト人民が社会主義建設に全力をつくしていること、人類の高い理想を英雄的に実現していることに歓喜している。わが国の庶民もいまやソ連が平和と喜びの国であることを知っている。文化工作者たるわれわれは特に社会主義文化におけるソ連文化工作者の偉大な成功と偉大な貢献を讃える……」⁽⁵⁸⁾ 電報の署名者のなかには魯迅と郁達夫の名があった。

1933年1月魯迅と郁達夫は中国民権保障同盟の設立を支援した。⁽⁵⁹⁾ 魯迅は同盟の指導的機関に選ばれた。郁達夫は新聞に『非法と非非法』(『非法与非非法』)を書いて同盟を援護した。⁽⁶⁰⁾ それは同盟の北京支部にたいする反動権力の迫害に抗議したものである。以上の事実により1932~1933年の魯迅と郁達夫は革命と民主主義のためにたたかう戦列にあったと結論できるだろう。

1933年のはじめ郁達夫は上海から杭州に移り住んだ。この反動の要塞への転居がどんなにひどい圧迫をもたらすかをよく知っていた魯迅は『阻郁達夫移家杭州』(『郁達夫の杭州転宅を思いとどませる』)⁽⁶¹⁾の詩を書いて上海にとどまるよう説得した。その後の事態がしめすように魯迅の危惧はあやまりでなかった。郁達夫は後日『回憶魯迅』⁽⁶²⁾でこう書いている。「かれ(魯迅—ペトロフ)はこの詩を解説して、杭州の諸党派のボス連のいわれなき圧迫をいおうとしたのである。しかし私はかれの警告を意に介せず杭州へ移り住んだが、その結果はかれの予想どおりで、国民党委員会のある先生のために家庭の破滅にまで追いやられたのだった。」⁽⁶³⁾

杭州移転後の郁達夫は魯迅と会う機会がめったになく、ただ上海へいっ

たときにだけ魯迅のところへしばしば⁽⁶⁴⁾いっている。二人の作家は以前のように民主的な雑誌、たとえば『文学』で協力しあったが、⁽⁶⁵⁾またも二人の間には現代社会における文学の使命にたいする考え方のちがいが次第にあらわれはじめた。たとえば、魯迅は林語堂の雑誌『人間世』や『宇宙風』が主張した『娯楽文学』を批判したが、郁達夫のほうはこれらの雑誌による⁽⁶⁵⁾こんで書いていたのである。魯迅と郁達夫が芸術的に同格にせよ、気質でも思想・創作上の観点でも異質であることを詳述する必要はない。しかし歴史がしめすように以上に述べたかれらの相互関係、民主主義とヒューマニズムの理想、国内の抑圧者と帝国主義にたいする憎しみ、文学への誠実な奉仕、これらがついにこの非常に異なる作家をひとつにして、その友情と協力をささえる前提となったのである。

注(1) 魯迅と郁達夫の相互関係については、曾华鵬と范伯群の「郁達夫論」(『人民文学』, 1957年, 5・6月合刊)に若干述べられている。しかし、残念なことに不確実な個所が多い。たとえば198頁には郁達夫が魯迅といっしょに『奔流』の編集にたづさわったとあるが、実際はこの雑誌の編集には関係しなかった、などその一例である。

(2) 『魯迅日記』, 北京, 人民文学出版社, 1959年, (以下すべて『魯迅日記』とする) 上巻, 442頁, この日に魯迅と郁達夫は魯迅の弟周作人のもよおした宴会で会っている。1923年2月27日魯迅は郁達夫の返礼の宴会に出て, 1923年2月28日に郁達夫の手紙をもらっている(同上)。

(3) 『56年代創作生活的回憶』, 1927年, 郁達夫全集, 第3巻, 上海, 北新書局, 1931年(第7版), 9頁, おそらく1923年2月に郁達夫は上海から北京へ短期間やって来て『創造社』の仕事をしたのではなかろうか。

(4) 1923年の『魯迅日記』には次のような記録がある。11月15日に郁達夫が魯迅を訪れた(上巻, 464頁), 11月22日には1923年10月出版の『蕪蘿集』を贈呈している(上巻, 465頁)。12月26日に魯迅を訪れ『創造週刊』半年彙刊を贈り, 魯迅からは『中国小説史略』をもらっている(上巻, 468頁)。1924年にかれらが往来して会っていることは『魯迅日記』の次の記録で確認される。4月30日, 6日15日, 7月3日, 11月2日と20日, 12月15日と25日(上巻, 485, 491, 493, 505, 507, 510, 511頁)。

- (5) 魯迅全集, 第5巻, 北京, 人民文学出版社, 1957年, 3頁。
- (6) 同上。
- (7) 郁達夫, 『世界日報』副刊編集者へ, (給世界日報副刊編者), 郁達夫全集, 第4巻, 上海, 北新書局, 1929年, 127~128頁。
- (8) 『魯迅日記』によると, 郁達夫の魯迅訪問は, 1925年12月24日(上巻, 549頁)と1926年7月31日(上巻, 585頁)である。郁達夫はこの2回短期間北京へ行き, 第1回は武漢から2回目は広州からいったものと思われる。1926年6月から8月へかけての郁達夫の北京旅行については郁達夫の『日記九種』, 上海, 北新書局, 1927年, 1頁を見よ。20年代の郁達夫の生活と創作の詳細については, 次の本がある。Anna Doležalova-Vičková. Remarks on the Life and Work of Yü Ta-fu up to 1930. "Asian and African studies," 1965, 1, pp. 53-80.
- (9) 『魯迅日記』上巻, 595頁(郁達夫の短信を受けとったという1926年10月29日付のもの)と601頁(1926年12月21日付のもの)これは郁達夫が広州を出発する前夜の12月14日にだした手紙。
- (10) 1927年10月5日李小峯が魯迅の上海到着に敬意を表してもよおした食事の席で客となり, また翌朝郁達夫はその後まもなく, かれの妻となった王映霞とともに魯迅を訪問する(『魯迅日記』上巻, 639頁)。
- (11) 『魯迅日記』上巻, 664~696頁(1928年)及び下巻709~745頁(1929年), 郁達夫は総計で1928年に55, 1929年に50のメモをあげている。
- (12) 『魯迅日記』上巻, 643, 667, 670, 671, 675頁等。たとえば1930年1月9日魯迅と許広平は郁達夫と王映霞の間に子供が生れたお祝いに二人に贈物をしている(下巻, 761頁)。
- (13) たとえば『魯迅日記』上巻664頁, 1928年2月12日郁達夫はハムスンの本を魯迅に借り, プーニンの本を魯迅に贈った。1930年1月20日(原文のまま, 26日のミスプリントと思われる——訳注)郁達夫は魯迅のところへ行き『達夫代表作』を贈呈した(下巻, 762頁)。
- (14) 『魯迅日記』下巻, 735頁, 1929年8月25日と28日付。
- (15) 魯迅全集第5巻, 北京, 人民文学出版社, 1957年, 4頁。
- (16) T. Hardy. "Life and Art" と "Why I don't write plays?" "The Pall Mall Gazette" より, 1892年8月, 31頁。
- (17) ツルゲネフはこの講演を1860年1月10日に貧困な文学者と学者救援会のための公開講演会で行なった。郁達夫はこれをドイツ語版の Iwan Turgenjew's ausgewählte Werke. Autorisierte Auflage, Hamburg (1869) から訳した。

- (18) R. Lindau. (1829-1910), "Das Glückspendel" (1909).
- (19) Ellis. Henry Havelock (1859-1939), "New Spirit" (1890).
- (20) Gerstäcker. Friedrich Wilhelm Christian (1816-1872). "Germelshausen."
- (21) 原文は「レフ・トルストイ」, 翻訳はアメリカ版の B.W. Huebsch'a "Reminiscences of Tolstoy" (1920) by Gorky, transl. by S. S. Koteliancky and Leonard Woolf; 郁達夫はこの翻訳の後書きでゴーリキイを賞讃している。
- (22) O'Flaherty. Liam (p.1897), "Spring Sowing" (1924) 中の "The Tramp" 翻訳には夏萊蒂が加わった。
- (23) Wilkins, Mary Eleonor (Freeman, 1852-1930). "A New England Nun," "A New England Nun and other Stories" (1891, 1920) 所収。
- (24) Aho, Juhanni (Brofeldt, Johann, 1861-1921). "Ein Wrack" "Das Skandinavierbuch," Josef Singer Verlag, Max Grell 編集所収。
- (25) Poppeneberg. Felix. "Nordische porträtes aus vier Reichen" 郁達夫はこの翻訳の短い後書きにこう書いている。この本は魯迅からもらったもので、翻訳をすすめられてとても気持のよい依頼だった(『奔流』第2巻第5号, 1929年12月, 811頁)。
- (26) 1928年9月20日から1930年6月1日まで毎月上海へいった。最初は郁達夫と夏萊蒂の編集, 1929年11月から陶晶孫編集。
- (27) 匡亞明, 達夫印象記, 賀玉波編『郁達夫編』, 光華書局, 1932年, 17頁。
- (28) 郁達夫が1928年8月8日に書き『語絲』(1928年8月13日, 第4巻, 33号)に発表した雑文『革命広告』を見よ。これは8月10日に魯迅が書いた同じ題の雑文といっしょにのったもので, 魯迅の選集や全集では『革命咖啡店』の題がついている。
- (29) 郁達夫が『創造社』との決裂をはっきりと宣言したのは1927年8月15日上海の新聞『申報』と『民国日報』においてである(曾華鵬, 范伯群, 郁達夫論, 『人民文学』, 1957年, 第5・6号, 198頁)。
- (30) 郁達夫, 社会にたいする態度(对于社会的態度), 『北新』, 第2巻第19号, 1928年8月16日, 41頁。
- (31) 郁達夫, バーナードショウ・とゴルソオルン, 評論(1933年2月1日), 全集第7巻, 上海, 北新書局, 1933年, 127頁。
- (32) 『萌芽』第1巻第3号, 1930年3月, 272頁。
- (33) 『招荒者』第1巻第3号, 1930年3月, 1129頁。
- (34) 中国現代文藝資料叢刊第1輯, 上海, 上海文芸出版社, 1962年, 157頁。
- (35) 『創造社論』黄人影, 上海, 光華書局, 1932年, 19頁。

- (36) この文章は『莽原』(第18・19号, 1927年10月10日)に発表された。
- (37) 『这样做』第7・8号, 1927年6月20日。
- (38) 『洪水』第3巻第29号, 1927年3月16日に発表。
- (39) 魯迅全集, 第4巻, 北京, 人民文学出版社, 1957年, 19頁。
- (40) 『洪水』第3巻第32号, 1927年5月1日。
- (41) 『奔流』第1巻第10号, 1927年4月20日。
- (42) 曾华鹏, 范伯群, 郁達夫論, 『人民文学』, 1957年, 第5・6号, 195頁。
- (43) 『大衆文芸』第2巻第5・6号, 1930年6月, 1582~1583頁。
- (44) 『紅旗日報』, 1930年11月22日付, 第91号, 11月16日に開れた中国左翼作家連盟第4回全体会議にかんする通報がその第2面に掲載されたが, 郁達夫の除名はそれについている。『紅旗日報』は党の機関紙だった。郁達夫の連盟除名ということは, 初期の連盟を指導していた左傾セクト主義路線のあらわれとしかみられない。
- (45) 郁達夫の除名約2週間後の1930年11月28日に郁達夫は魯迅を訪問した。『魯迅日記』下巻, 797頁。
- (46) 『魯迅日記』下巻, 864頁から957頁。1932~1933年の日記。
- (47) 同上, 下巻, 883頁と922頁。
- (48) 同上, 下巻, 864, 879, 888頁。
- (49) 同上, 下巻, 899頁。
- (50) 詩の原文は魯迅全集第7巻, 北京, 人民文学出版社, 1958年, 154頁を見よ。
- (51) 『魯迅日記』下巻, 910~911頁。
- (52) 魯迅が『自由談』に載せはじめたのは1933年1月30日からである。
- (53) 増田渉(1903年生れ)現代中国文学にかんする著作が多い。多くの大学で講義しており1956年から大阪市立大学教授。1931年4月から12月まで上海にいて, しばしば魯迅の家の客となった。魯迅とともにその『中国小説史略』を読み日本語訳(『支那小説史』, 1941~1942年, 2巻本)の準備をした。増田渉は(『阿Q正伝』, 1946年)その他魯迅作品の翻訳者(『魯迅の印象』, 1948年)の著者として名高い。
- (54) 『魯迅書簡補遺』, 上海, 上海出版公司, 1952年, 141, 143頁。ついでながらなおこの小説では王独清が嘲笑されている。
- (55) 1932年7月16日, 魯迅は増田渉の手紙をうけとるなり早速郁達夫宛に便りを出した。7月18日にかれの返事があり, その日に増田渉に手紙を書いて解説している。(『魯迅日記』, 下巻, 880頁)。
- (56) 魯迅全集第5巻, 北京, 人民文学出版社, 1957年, 483頁。

- (57) 沈鵬年，魯迅研究資料編目，上海，上海文芸出版社，1958年，488頁。
- (58) 『文学月報』，第5・6号，1932年12月15日，255頁。
- (59) 郁達夫が民権保障同盟に加入した年については間違っただことを述べている人がいくらかいる。たとえば葉丁易は『達夫選集』（北京，開明書店，1951年，14頁）で1932年となし，曾鵬華と范伯群は『郁達夫論』（『人民文学』，1957年，第5・6号，198頁）で1929年としている。実際は民権保障同盟が創設されたのは1933年1月17日であり，当時の上海の諸新聞はその宣言をのせた。
- (60) 郁達夫全集，第7巻，上海，北新書局，1933年，141～143頁。
- (61) この詩は1933年12月30日の作である。原文は魯迅全集，第7巻，北京，人民文学出版社，1958年，162頁。
- (62) 郁達夫の『回憶魯迅』は最初『宇宙風』（第1号，1939年3月1日）にのった。
- (63) 『魯迅旧詩箋注』，張向天著，広州，広東人民出版社，1959年，166頁。張向天は「家庭の破滅」ということばを解説して，国民党の有力な官僚許紹楙が郁達夫の妻を奪いとり，かれを杭州にいたたまれなくした，といっている。
- (64) 『魯迅日記』下巻，1039頁（1935年12月7日付日記），1055頁（1935年4月30日付，魯迅はこの日郁達夫に『准風月談』を贈っている。1085頁（1935年12月7日付）。
- (65) 1934年から1935年へかけての『人間世』には郁達夫の自伝がのった。

訳者後記

この訳稿をのせるに至ったいきさつをちょっと記す。

この論文の値うちを発掘してくれたのは鈴木正夫氏である。私はこの論文のロシア語による抜刷を1967年の5月にペトロフ教授から頂いた。そしてその訳稿を増田渉先生にお送りし，その読後の批評を先生からお手紙いただいたので，先生のお許しをえて手紙のゼロックスをペトロフ教授にお送りしたことがある。その後2年を閲して東洋学文献センター叢刊第5輯として『郁達夫資料』（東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センタ，昭和44年10月）が伊藤虎丸，稲葉昭二，鈴木正夫3氏の編により，立派な日本でなければとてもできないような内容をもって世にあらわれた。鈴木氏はどこからともなく，おそらく尾上兼英教授からかと思うが，私にペトロフ先生の『魯迅と郁達夫』の訳稿あるを知ったらしい。『資料』の補遺作製上一読させてほしい旨の鄭重なお手紙をいただいた。早速原稿をお送りしたところ，おいかえし鈴木氏からの便りで，「早速一読させていただき，強い衝撃を受けびっくり致した次第です。と申しますのは，おそらく日本に入っていないのでは

ないかと思われる資料を数多く駆使して、綿密な私などの与り知らぬ郁達夫に関する事実の論証がなされていたからです。……」というこゝで、今度は私のほうがおどろいた。観点のちがいから増田先生はこの論文をあまり高く買っておられなかったように思う。私などにいたっては、批評の能力もなく問題外である。そういうわけで私はこれを活字にしなければならぬと思った。また鈴木氏も盛んにすすめてくれる。それで『小樽商大人文研究』にのせてもらうことにしたというわけである。

参考までに記すところの論文(ЛУ СИНЬ И ЮЙ ДА-ФУ)は、1967年1月の『レーニンград大学通報』にのったものである。表紙の原文は次のとおり。

ВЕСТНИК ЛЕНИНГРАДСКОГО УНИВЕРСИТЕТА

ГОД ИЗДАНИЯ ДВАДЦАТЬ ВТОРОЙ

ЖУРНАЛ ВЫХОДИТ 24 РАЗА В ГОД, ПО ЧЕТЫРЕ НОМЕРА КАЖДОЙ СЕРИИ

2

ИСТОРИЯ □ ЯЗЫК □ ЛИТЕРАТУРА

ВЫПУСК 1

ЯНВАРЬ

1967

ИЗДАТЕЛЬСТВО ЛЕНИНГРАДСКОГО УНИВЕРСИТЕТА

なお、この論文の最後には次のような英文のサマリーがある。

Friendly relations between the two famous authors Lu Hsün and Yü Ta-fu started since 1923. From 1927 up to 1933 their collaborations became particularly active. In the period of the discussion on revolutionary literature Lu Hsün and Yü Ta-fu's viewpoints on the subject were alike. Afterwards, they both collaborated with some democratic organizations (China Freedom League, China League of Left-Wing Writers, etc.) and joined their efforts in supporting progressive movements of Chinese intellectuals.

最後に一言しておくが、この翻訳は増田先生や鈴木氏その他の方々にお見せした訳稿を改めたものであって、旧稿にあった脱漏や誤ちを訂正した。たとえば、「这样做」は日本語による訳語が落ちていたのでそれを加えて『こうなさい』とした。岩波版魯迅選集(第8巻)に『こうする』と訳してあるのを無視したわけではないが、ロシア語の原文では命令形なのであえて『こうなさい』とした。中国語の『这样做』は以上の何れにも訳せる。しかし私は資料不足で、この雑誌を見たこ

とがないので、何れとも判断できない。そういうことではひとつの問題を発見したといえるかもしれない。何れが正しいか広く御教示を賜わりたいところである。なお、鈴木氏の御指示によりロシア語の原文で郁達夫らの作品などに原題のないものは補った。たとえば『語絲』や『奔流』に郁達夫がのせた翻訳などはそれで、原題と日本語訳と同じになる『十月』、『農夫』、『果樹園』などは重複を避けた。この作業を行なうことで、私の翻訳の誤りを正すことができたことを鈴木氏に厚くおん礼申し上げる。

この原稿を編集者に渡した後ペトロフ教授から手紙をいただいた。それには先にお送りした『郁達夫資料』を補充する事項若干が書かれていた。そしてこれらは鈴木正夫氏の関心をひくものであろうし、第2版を出すばあいにも役立つだろうとあった。それらの補遺となる事項は次のとおりである。「 』は『郁達夫資料』の記載。

p. 5. 『她是一个弱女子（後に「饒了她」と改題） 潮風書局 1932』

これには初版の年月を補える。初版は1932年4月である。1932年12月には、まだこの題名による重印だったが、出版所は現代書局になっていた。

p. 4. 『在寒風裏（単行本） 世界文芸書店 1929』

この初版は1929年6月に廈門で出た。その目次は次のとおり。1. 自序, 2. 故事, 3. 逃走, 4. 馬蜂的毒刺, 5. 在寒風裏。

p. 1. 『文藝論集 仙島書店』

1930年10月に仙島書局の増訂再版本がはじめにあげられているが、1926年4月に初版が出ている。

p. 1. 『蔦蘿集 辛夷小叢書 泰東書局 1923（慶應大）……』

この初版は1923年10月である。

さらにペトロフ教授は『郁達夫資料』のビブリオグラフィに入っていないものとして、次の書物をあげる。

郁達夫選集 萬象書屋 上海 1936年4月初版。

p. 20. 『c9 ○達夫詩詞集 鄭子瑜編 星洲世界書局版 1957・10（4版序）……』

この本の初版は1948年6月に広州で出た。附録の翦春箋・鄭子瑜作が最後の6頁をしめる。